

## 高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもを 対象とした、放課後支援を通じた社会性発達支援に 関する実践的研究

平野 幹雄 (東北文化学園大学・宮城教育大学特別支援教育総合研究センター)

鈴木 徹 (東北大学大学院教育学研究科)

長谷川 武弘 (お茶の水女子大学)

野口 和人 (宮城教育大学特別支援教育総合研究センター)

### 要約

筆者らは、高機能自閉症児およびアスペルガー症候群の子どもを対象とした放課後支援を通じての、社会性発達支援をおこなってきた。今回は、三年間の取り組みを通じて対象児の社会性にどのような変化が生じたのかについて報告した。対象児は高機能自閉症あるいはアスペルガー症候群児 5 名であった。鉄道に関するブログの運営、定例会の開催を通じて支援を行ってきた結果、ブログ上では、自分の撮影した列車の説明に加えて、撮影時の状況や心情の説明もできるようになってきた。また、例会でも、大学教員やボランティアなどの発言に耳を傾ける姿が見られるようになってきた。以上のような変化には、自他の発言を振り返ることの出来る仕組みと、リスペクトできる他者からそうした振り返りを行うことを長期間促されてきたことが関係しているものと推察された。

### 1. はじめに

高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもの中核的な障害の一つは社会性の問題である(Wing, 1996)。社会性の問題を改善させる試みとしていわゆるソーシャルスキル・トレーニングがあり、社会性の改善が見られるという報告が多々存在する(Barnhill, Cook, Tebbenkamp, & Myles, 2002; Barry, Klinger, Lee, Palardy, Gilmore, & Bodin, 2003)。一方で、かかわりの期間が短いこと(数ヶ月)、獲得したスキルを実生活上で発揮することが難しいことなどが問題点として指摘されている(Barry ら, 2003; Marriage, Gordon, & Brand, 1995; Webb, Miller, Pierce, Strawser, & Jones, 2004)。

本来子どもは、コミュニケーションや遊びなどにおける他者との相互作用を通じて社会性を獲得するはずである。杉山(2008)も、発達障害の子どもにとって社会的な経

験を積む学校のような場が重要であることを指摘している。にもかかわらず、高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもは、学年があがるにつれて学校やコミュニティで孤立してしまう傾向にある。こうしたことを受けて、2008 年より、筆者らは自閉症スペクトラム児の社会性の発達を促すために鉄道研究会と称するサポートシステムを運営してきた。今回は、三年間の取り組みを通じて対象児の社会性にどのような変化が生じたかについて報告する。

## II. 方法

### 1. 参加者

14 歳から 18 歳までの高機能自閉症およびアスペルガー症候群の男児 5 名(平均年齢 15.2 歳、SD±2.3)。加えて、筆者ら大学教員、大学院生、学部学生、同卒業生など 37 名がメンバーとして登録された(平成 23 年 3 月末)。参加児の保護者にインフォームドコンセントをおこない、実践への参加及び研究協力に対する同意を得た。

### 2. 鉄道研究部会とは

子どもたちがお互いの存在を意識し、多くの社会的な相互作用が生じさせることを目的として以下に詳述する三つの活動からなる放課後支援(通称、鉄道研究部会)をおこなってきた。なお、多くの社会的な相互作用を生じさせる枠組みを作るに当たっては、Cole(1996)が行っている読み書き支援(通称、第五次元)を参考にした(表 1 に筆者らの研究との対比を示した。詳細は平野・鈴木・野口(2010)を参照されたい)。

表1. Coleの実践との比較

	Cole(1996)の実践	筆者らの実践
①子どもが積極的にしたいと思う活動を設計すること	教育的に効果のあることに子どもの興味を結びつける意図があった。	対象児が、鉄道やコンピュータに興味を持っていたことから、両者を組み合わせて社会性発達の支援を行うこととした。
②文字や口頭でのコミュニケーションが豊富に生じる活動を作り出すこと	コミュニケーションを道具として捉えており、それらが問題解決の目標や方略構築において頻繁に用いられることが重要と考えていた。	双方向型のブログの運営と定例会の開催(ブログへの投稿内容の振り返りをおこなう)、一日旅行(企画コンペをおこなって旅程を決定した)を通じておこなうこととした。
③コンピュータを用いたコミュニケーションが豊富に生じる活動を作り出したこと	男児と比較してコンピュータを用いた活動を女児があまりしなかったことへの配慮として、コミュニケーションするためにメールを書くことが用意されていた。	コミュニケーションを苦手としている対象児が自分のペースに合わせてブログに投稿可能であること、彼らに視覚的な要素を用いた援助が効果的であること(別府ら, 2005)から、写真等を利用することが可能であることからコンピュータを重視した。
④対象児にルールを遵守させたこと		特に、投稿は一日一回まで(コメントは制限せず)というルールを設け、投稿だけでなく他者の投稿にコメントすることを促した。

### 3. ブログの運営

鉄道に関して投稿及びコメント可能なブログ(SNS)をインターネット上に設営し、非公開にて運営をおこなった。定例会の開催を含め、対象児と他者、人工物(コンピュータ)の三項関係を維持し、積極的に相互作用が生じるような環境を設けた。ブログを活用した利点としては、子どもが自分のペースに合わせて投稿可能であること、言語表現が苦手であることに対して写真等を使い、後に振り返りが可能であることがあげられた(図1に概念図を示した)。

### 4. 定例会の開催

毎週火曜日の17時から19時までとした。定例会は、各々がおこなったブログへの投稿記事をスクリーンに映し出して振り返り、他者からの質問を受けつけ議論する機会と位置づけた。ふさわしくない投稿記事ややりとりが展開された場合、適切なふるまいのあり方について教員や学生が助言をおこなった。同時に、自分の発言を振り返り他者との意見の相違を通じて新たな気づきを促すよう支援した。加えて、2009年度より前後にフリートークの時間を30分ずつ設け、発表者以外の子どもにおいても積極的なコミュニケーションが生じるように促した。また、子どもたちが、積極的に他者と交流できる場を設けるために年に数回の一日旅行を企画、実施した。実施に当たっては、子どもたちが旅行のスケジュールを作成、お互いに発表し合うコンペを実施した。

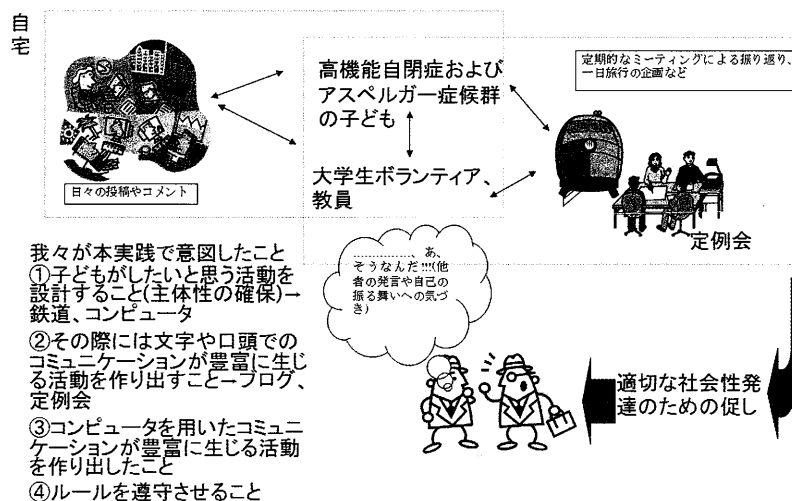


図1. 筆者らの放課後実践の枠組みについて

### Ⅲ. 結果

2008 年の 2 月にブログページを開設以来、2011 年の 4 月までにのべ 35000 件の閲覧があり、1500 件を超える投稿があった。以下、開設当初と 3 年後を比較しての記載内容の変化点を中心に記載することとする。

#### 1. ブログの記載内容とテーマについて

ブログを始めた当初、子どもたちは自らの思い入れのある列車に関する話題のみを投稿する傾向にあった。また、投稿内容に関しては、列車に関する意味的な説明がほとんどであり、撮影時の様子や心境などについて述べられているものは皆無であった。一方、最近では、直前の投稿と関連のある話題を投稿したり、タイトルそのものをものじったりという様子が見られるようになってきた。また、投稿内容に関しても撮影時の様子や心境などについて含まれることが多くなった。図 2 は、撮影した列車の記述の有無、撮影状況の記述の有無、撮影した時の気持ちの有無、ストーリー仕立ての説明の有無、ぶれ、障害物の有無、列車の顔がはみ出しているか否かについて、A 君の最初の 10 投稿と 3 年後の 10 投稿を比較したものである。最初の 10 投稿に関しては、撮影した列車の記述が含まれていたのが 10 投稿中 8 投稿、撮影状況の記述が同 0 投稿、撮影した時の気持ちが同 0 投稿、ストーリー仕立てで説明が同 0 投稿、ぶれ、障害物が無かったのが同 4 投稿、列車の顔のはみ出しの無かったのが同 7 投稿であった。3 年後の 10 投稿については、撮影した列車の記述が含まれていたのが 10 投稿中 8 投稿、撮影状況の記述が同 9 投稿、撮影した時の気持ちが同 9 投稿、ストーリー仕立てで説明が同 8 投稿、ぶれ、障害物が無かったのが同 10 投稿、列車の顔がはみ出しの無かったのが同 10 投稿であった。

#### 2. 定例会の開催について

定例会を始めた当初、子どもたちは他人の発言中にじっとして席に座っていることができなかったり、他人の発言を遮ったりする振る舞いが頻発していた。その後、徐々にそうした振る舞いは減少したが、他者の悪口を平然と言う様子が依然として散見された。また、「なぜ、〇〇君とは仲良くできないのだろう？」と大学教員に質問してくる様子が見られた。対象児のなかには、大学教員やボランティアなどの年長者の意見に耳を傾けるようになった子どもも存在した。同時に、リスペクトできる対象は年長者だけでなく、対象児同士にまで広がっていった。年長者のアドバイスによって納得できなくとも、他児からのアドバイスを聞き入れることのできた場面が何度も見られるようになってきた。

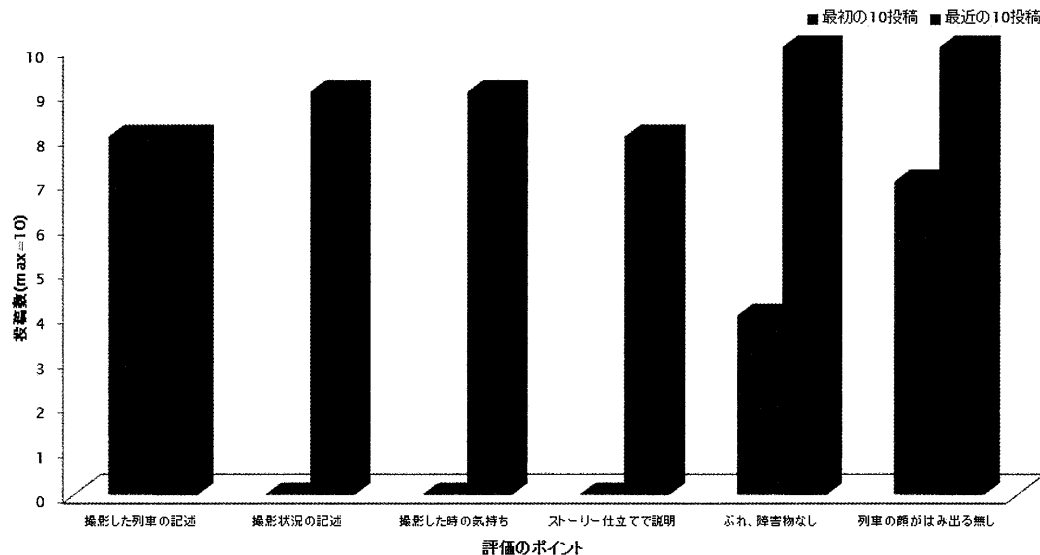


図2. A君におけるブログへの投稿内容の変化

一日旅行の企画に関するコンペは二度実施した。一度目のコンペの時には、対象児全員が自分の撮影したい電車の見られる地方へ行きたいという旨を強硬に主張していたが、約一年後にもう一度開催した際には、ある対象児が自分のプランについて他のメンバーから支持を得ようとしていた。彼は、自分のプランを一方的に主張するのではなく、どのような食事が好みか、どのような観光地に行きたいかを他のメンバーに取材し、それらを自分のプランに反映させていた。

#### IV. まとめ

本稿では、高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもを対象とした、主体的な活動を促すための放課後実践について、特に過去3年間における子どもたちの変化に注目して報告をおこなった。ブログ上では、自分の撮影した列車の説明に加えて、撮影時の状況や心情の説明もできるようになってきた。また、1日旅行の企画コンペの際には、他者からの支持を得ることを意識した企画を立案するようになった。定例

会でも、大学教員やボランティアなどの発言に耳を傾ける姿が見られるようになってきた。

本来、高機能自閉症及びアスペルガー症候群の子どもは、自分の言動を振り返ることが苦手である。Millward, Powell, Messer, and Jordan (2000)は、自閉症児を対象とした自伝的記憶の想起に関する研究をおこなった。自伝的記憶とは個人が過去に直接経験した出来事に関する記憶である(Conway, 1990)。Millward ら(2000)は、同等の言語能力を有する定型発達児、学習障害児における自伝的記憶の想起内容には、他者に関する情報に比べ自身に関する情報がより多く含まれていたこと、それに対し自閉症児の想起内容には、自身に関する情報より他者に関する情報の方がより多く含まれていたことを明らかにした。本研究の対象であった高機能自閉症児およびアスペルガー症候群児においても、実践の開始当初は投稿した列車に関する記述こそ多くの投稿に含まれていたものの、撮影状況の記述や撮影したときの気持ちの記述が含まれていたものは皆無であった。自己に関する情報を過去の記憶から参照しブログを執筆する様子は見られなかったという点では、Millward ら(2000)らのデータと符合していたことになる。

一方、3年後のデータでは、撮影状況の記述が10投稿中9投稿に、撮影したときの気持ちの記述が10投稿中8投稿に含まれていた。こうした対象児の変化には以下のことが関係していよう。第一は、自他の言動を可視化して振り返る仕組みを埋め込み、ブログや定例会をおこなうという支援を長期間続けてきたことである。具体的には、彼らのブログでの投稿はオンライン上に保存されており、いつでも閲覧することが出来ることに加えて、定例会で自分の投稿を発表することを通じて、周囲の大人が撮影時の状況や気持ちを振り返るように促し続けてきたことが大きく関係しているものと考えられる。もう一つは、対象児において振り返りを促してきた他者(特に大学教員や大学生ボランティア)との関係が変化したことである。具体的には、年齢や社会的な立場では無く、鉄道について筆者らをリスペクトするようになったことが大きく関係していると考えられる。つまり、鉄道という共通の土俵ができあがり、筆者らが親しくもリスペクトされる存在になったことで、YOUという存在、すなわち「その人の身になってくれる人、その人のことを親しく思ってくれる人、その人の意図を理解してくれる人(佐伯, 2007)」の条件を満たしたものと考えられる。佐伯(2007)は、子どもがYOUを媒介にして社会・文化の実践社会(THEY)を垣間見るということを通して発達していくと主張している。そうした存在となり得た筆者らが自他の言動を振り返るように促してきたからこそ、そうした行為が徐々に見られるようになってきた可能性がある。

以上のように、対象児が自他の言動を振り返ることができるようになってきたことは、実践開始から3年目に入って、筆者らだけではなく子ども同士の間でもリスペク

トできる関係が成立し始めてきたこととも関係していよう。筆者らの存在が高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもと社会・文化の実践社会との架け橋となった可能性については過去に述べた(図 3-a、平野・鈴木・野口, 2010 を参照のこと)。子ども同士が YOU の関係になり始めたことで、子どもにとっては架け橋の数が増え、より多様な社会・文化の実践社会と結びつき始めた可能性がある(図 3-b)。実際、対象児の中には我々の主催する放課後実践以外にも学校での行事や部活動にも積極的にかわるようになり、その結果として放課後支援を欠席する子どもも出現している。一方、筆者らが架け橋となり得ない、他児との間でもそうした関係を構築することが困難な子どもも存在した。そうした事例は独自の価値観を他者に押しつけてしまい、それを周囲が咎めても受け入れることができず、自分の価値観を信じて疑わない傾向にあった。それでも、直近では周囲に促されて自他の発言を振り返ることが増え、自らの言動を一部修正しようという努力が見られるようになってきたことから、過去の言動を可視化できる仕組みと、そこにリスペクトできる他者からの促しが介在することが、彼らの言動を振り返ることの変化に少なからず影響を与えたものと推察される。

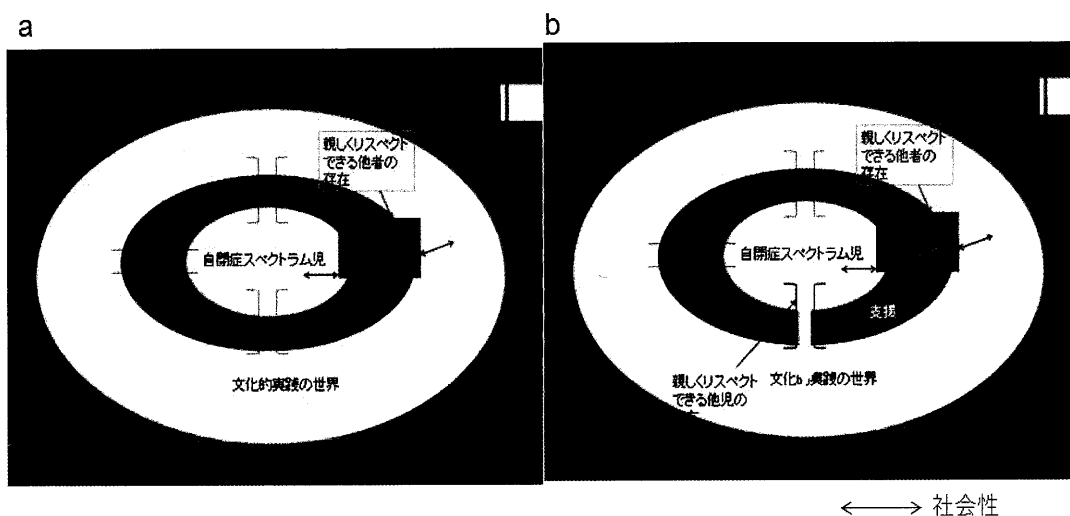


図3. 子どもと文化的実践の世界における他者の役割  
aは2年目まで、bは3年目以降の拡がりを示す。

## 文献

- 1) Barnhill, G.P., Cook, K.T., Tebbenkamp, K., & Myles, B.S. (2002). The effectiveness of social skills intervention targeting nonverbal communication for adolescents with Asperger syndrome and related pervasive developmental delays. *Focus on autism and other developmental disabilities*, 17(2), 112-118.
- 2) Barry, T. D., Klinger, L.G., Lee, J.M., Palardy, N., Gilmore, T., & Bodin, S.D. (2003). Examining the effectiveness of an outpatient clinic-based social skills group for high-functioning children with autism. *Journal of autism and developmental disorders*, 33(6), 685-701.
- 3) Cole M. (1996). *Cultural psychology. A once and future discipline*. Cambridge: Harvard University Press. (天野 清訳 (2002). 文化心理学—発達・認知・活動への文化・歴史的アプローチ. 新曜社).
- 4) Conway, M. (1990). *Autobiographical memory: an introduction*. London: Oxford university press.
- 5) 平野幹雄・鈴木 徹・野口和人(2010) 高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもへの社会性発達支援の試み. 宮城教育大学特別支援教育総合研究センター紀要, 5, 22-30.
- 6) Marriage, K.J., Gordon, V., & Brand, L. (1995). A social skills group for boys with Asperger's. *Australian and New Zealand journal of psychiatry*, 29, 58-62.
- 7) Millward, C., Powell, S., Messer, M., and Jordan, R. (2000). Recall for Self and Other in Autism: Children's Memory for Events Experienced by Themselves and Their Peers. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 30(1), 15-28.
- 8) 佐伯 胖 (2007) 共感. 育ち合う保育のなかで. ミネルヴァ書房.
- 9) 杉山登志郎 (2011) 発達障害のいま. 講談社現代新書.
- 10) Webb, B., Miller, S.P., Pierce, T.B., Strawser, S., & Jones, P. (2004). Effects of social skill instruction for high-functioning adolescents with autism spectrum disorders. *Focus on autism and other developmental disabilities*, 19(1), 53-62.
- 11) Wing, L. (1996). *The autistic spectrum. A guide for parents and professionals*. London: constable and company limited. (久保紘章・佐々木正美・清水康夫監訳 (1998). 自閉症スペクトル. 親と専門家のためのガイドブック. 東京書籍.)